



天恩山五百羅漢寺における復元研究 —江東区における黄檗派寺院建築—

K03061 黒川 佳奈

1 研究の目的と方法

1-1 研究背景と目的

これまでの建築史分野の中で、近世(安土桃山・江戸時代)に建立された寺院・神社の研究は古代・中世の建造物を対象とした研究に比べ、等閑視されてきた感を免れない。

しかし、昭和 50 年代に近世社寺建築の全国調査が実施され、資料が蓄積されたこともあり、近年では個別の研究もなされるようになった。

本大学のキャンパスが豊洲に移転し、江東区の文化財を調べたところ、建造物文化財は旧弾正橋(重文)・明治丸(重文)・旧大石家住宅(区指定)を含む 102 件が登録されていて、そのほとんどが石造燈籠や鳥居である。

ところが江東区の文化財研究紀要に黄檗派の研究があり、中でも五百羅漢寺は 1870 年にパリで刊行された『日本図説』で紹介され、高村光雲著の『光雲懷古談』では「特別保護建造物となるべきもの」と評されるものであったが、今日では遺構すら残っていない。

そこで本研究では、現在の江東区大島にあった江戸時代当時の天恩山五百羅漢寺を取り上げる。『江戸名所図会』や安藤広重の『名所江戸百景』などにも描かれている五百羅漢寺の本殿の復元を行い、江東区に存在したかつての名刹の姿を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究方法

- ① 黄檗派についての理解を深める。
- ② 同寺などでヒアリング調査を行うなど可能な限り資料収集し、内容を把握する。
- ③ 類似事例建築(白金台の瑞聖寺)の把握をする。
- ④ ②と図会・写真史料に基づいて③を参考に 3 次元 CAD で復元を行う。

2 黄檗宗とその建築

2-1 黄檗宗

日本における仏教の宗派で、臨済宗、曹洞宗に次ぐ禅

宗の一つであり、江戸幕府の宗教統制の中で唯一公認された外来宗派であった。当時、臨済宗、曹洞宗が日本風に姿を変えていたが、黄檗派は明朝風様式を伝えていた。

江戸時代初期の承応 3 年(1654)に中国福建省から招聘された中国臨済宗の隠元隆琦禪師によって伝えられた。

黄檗宗はもともと禅宗臨済宗の一派だったが、鎌倉時代から室町時代初期に日本に伝わり、日本化していった臨済宗と、江戸時代初期に伝えられた黄檗宗では 400 年の隔たりがあり、黄檗宗は仏像や建築様式、修行生活に至るまで、禅宗の中でも特異な様相となっていたため、「臨済宗黄檗派」呼ばれていた。明治 9 年(1876)の宗教政策により「黄檗宗」として正式に禅宗の一宗として独立した。本稿では「黄檗派」と呼称する。

2-2 黄檗山萬福寺

萬福寺は黄檗派の総本山で、隠元禪師によって寛文元年(1661)に開創された。萬福寺は明末清初の手法を採用したため中国的で、中世に伝来した宋様式の禅宗寺院の伽藍とは趣を異にしている。創建以来、各地で建立された黄檗派寺院は、可能な限り萬福寺の建築様式を手本とし、伽藍造営が遂行されていたと考えられる。

現在、萬福寺の塔頭は 33 カ院に及び、1745 年の「末寺帳」には、1043 もの末寺が書き上げられている。

2-3 黄檗派建築

黄檗派寺院の境内構成と建築形態は、明様式を取り入れた極めて独創性の高いもので、天王殿の存在や、僧堂に代わって禅堂と齋堂が分立並建され、庫裏が齋堂の背後にある点などは黄檗派寺院の伽藍配置上の顕著な特徴として挙げられる。【表 1】に一般禅宗と黄檗派寺院の建築、伽藍構成の相違をまとめる。

3 江戸黄檗

3-1 江戸黄檗

万治元年(1658)に江戸で最初の黄檗派寺院が深川に

【表 1】 一般禅宗と黄檗派との比較

臨済・曹洞宗	黄檗派
建築様式	基礎の他に月台を有するものがある
基礎がある	面取りされた角柱
禅宗様標準の円柱で、粽がある	礎盤がある。角のとれた四角で四周に浮き彫りが施してある
礎盤がある。そばん玉のような形	肘木は大仏様が混用され、縁形が施されるなど装飾的
肘木は禅宗様の標準。木鼻などに縁形・絵様を多用し装飾的要素が強い	主要堂舎の前面一間が吹き放ち
装飾が付く	内部は化粧屋根裏が多い。吹き放ち部分は垂木が円弧を描いたヴォールト状の天井
板を一面に平らに張った鏡天井。周囲一間通りは垂木を化粧に現した化粧屋根裏。海老梁虹	垂木の木口が横に平べったい
強い反りのある尾垂木	花頭窓の他にしばしば円窓が用いられ
禅宗様の花頭窓	瓦葺。中央に宝珠の様飾がある
?葺、檜皮葺、茅葺が多い	同様
土間床式で、石・瓦を四半敷にする	
伽藍	
総門・山門・仏殿・法堂・方丈が中心軸上	三門・天王殿・仏殿・法堂が中心軸上。方丈は中心軸上にない。
山王殿はない	山王殿がある
僧堂がある	僧堂に代わり禅堂・齋堂がある
仏殿の前方に僧堂と庫院が相対している	仏殿の前方に禅堂と齋堂が相対している。庫裏は齋堂の背後にある。
山門の手前に東司と浴室が相対している	山王殿の手前には堂舎はない。浴室と東司は主要堂舎から外れている
仏殿の前方の空間に木がある	中庭には木はない
一般的には回廊がなくなっている。以前	主要堂舎は回廊で結ばれている

開創し、以降、江戸には黄檗派は 28 カ寺庵が成立した。黄檗派はその独特な文化と救済精神の宗風からも、將軍家綱をはじめ上層階級から一般民衆にも受け入れられ、江戸における黄檗派の成立となる。

当時の江戸は町方人口、特に下層階級が急激に増加したため、幕府は彼らの埋葬問題と、寺請制度のためには寺院不足の問題という下層民対策を新しい宗派である黄檗派に任せたのである。一方、黄檗派側にしても下層階級の埋葬場の役目でも江戸での教線が拡大されるというように、黄檗派の拡がりには幕府と黄檗派の利害が噛み合った必然性を含んだものと結論付けられる。

3-2 紫雲山瑞聖寺(港区白金台 3-2-19)

寛文 10 年(1670)に隠元の弟子・木庵を開山とする江戸で 5 番目に成立した黄檗派寺院である。翌 11 年には大雄宝殿が建立され、再々火災にあったが復興し、宝暦 7 年(1757)に再建されたものが、昭和 59 年(1984)に東京都有形文化財に指定され、平成 4 年 8 月(1992)に国指定重要文化財に指定された。

大雄宝殿は桁行三間・梁行四間・裳階付・入母屋造・本瓦葺・東面の大規模な仏殿である。【写真 1・図 1】

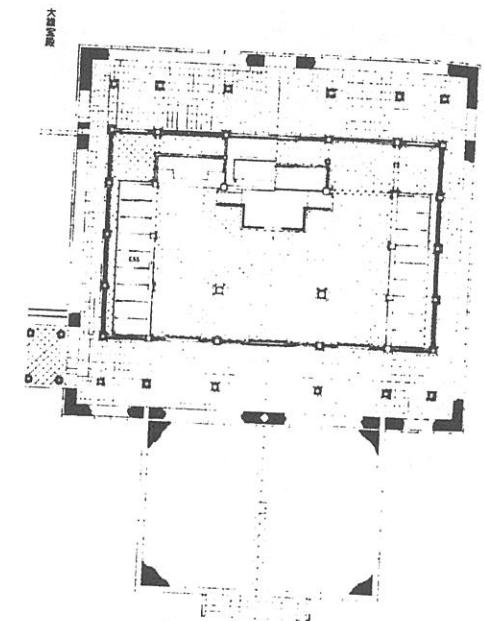
4 天恩山五百羅漢寺

4-1 五百羅漢寺

鉄眼禪師を開祖、弟子の松雲を開基とする江戸の黄檗山の末寺。元禄 8 年(1695)本所五ツ目(江東区大島 3



【写真 1】 瑞聖寺 大雄宝殿



【図 1】 瑞聖寺 大雄宝殿平面図

丁目 1 番地で、現在は石碑が展示のみ)に仮堂で開かれた。

本建築は本山から派遣された象先和尚(3 代目)がとりかかり享保 5 年(1720)西羅漢堂完成から 10 年ほどで伽藍を完成させた。松雲禪師が貞享年間から元禄年間の十数年かけて彫り続けた、五百羅漢の像のためのお堂であり、当時 536 体あった。

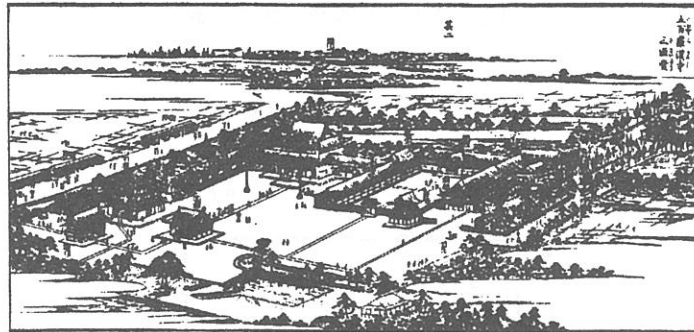
五百羅漢を訪ねれば「死者に逢える」という信仰で、羅漢寺は大いに栄え、仏殿や三匠堂などの独創的な建物のためにも、江戸を代表する観光名所となった。その後衰退していったが、明治 20 年(1887)に墨田区緑町に移転するまで、本殿は健在であった。

明治 20 年(1887)に目黒区の現在地(東京都目黒区下

目黒 3-20-11)に移ったが荒廃はすすみ、昭和 56 年になって現在の近代的な堂が完成した。現存する羅漢像など 305 体が江戸期を代表する木彫像として東京都指定文化財に指定されている。

4-2 伽藍

近世の図会では、総門を入り、左に三匠堂、右に天王殿が並んでいる。三匠堂は俗にサザエ堂と呼ばれ後世の三匠堂の規範となる。仏殿は、本殿の両脇にそれぞれ東西の羅漢堂が袖廊によって連結されている。【図1・図2】



【図2】『江戸名所図会』五百羅漢寺

4-3 仏殿

◆仏殿規模：『江戸黄檗禅刹記』より

本殿(大雄殿)——南向縦九間四方(54尺四方)

袖廊——各縦三間半、広十間(60×21尺)

東西羅漢堂——各縦六間、広十間(36×60尺)

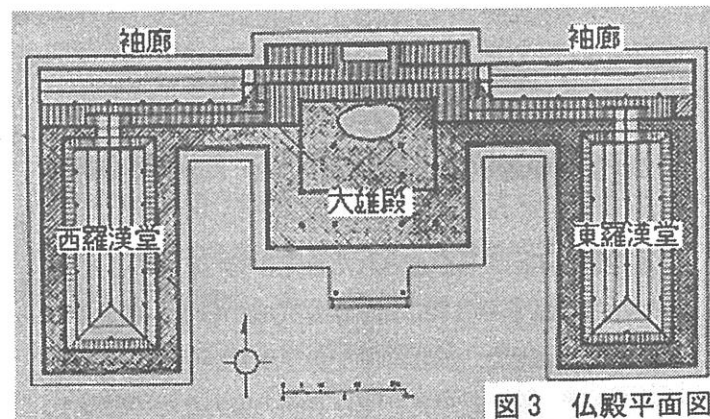


図3 仏殿平面図

羅漢堂に関してはその内部の様子が『江戸名所図会』などに記されている。東羅漢堂から本殿を通り西羅漢堂に続く一方通行の回遊式仏堂となっていた。そして、この参拝路がじっくりと参拝したい人用の板張床のルートと急いで回りたい人用の土間のルートの2つに別れていて、途中太鼓橋によって立体交差し、橋中央も手摺りで

往復2レーンになっていて、決して互いにぶつからないようにつくられていたようだ。もともと檀家などもなく、托鉢による寺院のため、板敷参詣路には賽銭箱があるが土間参詣路には賽銭箱がないというように庶民の参詣に対して特に留意していたようである。

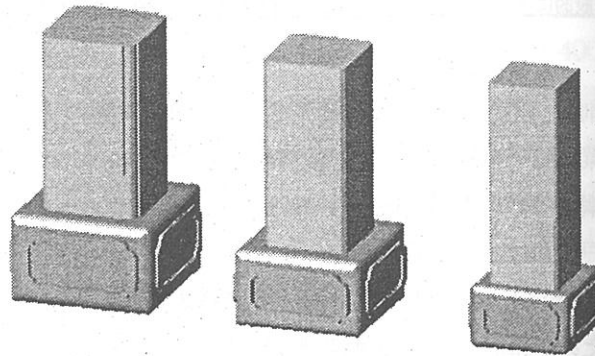
5 復元

天恩山五百羅漢寺の復元は、写真と図会を基にして、紫雲山瑞聖寺を参考に復元を行う。

5-1 部材の復元

① 礎盤

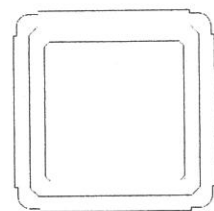
写真より、四周に浮き彫りが施された角の取れた四角い形状である。



【図4】礎盤

② 柱

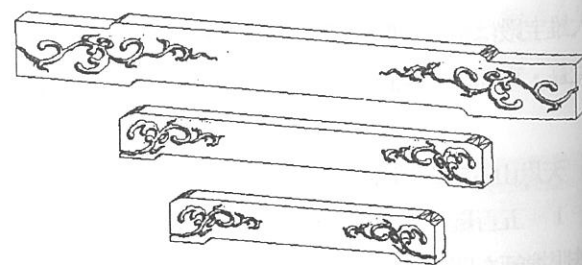
図会と瑞聖寺を参考に四天柱は几帳面取、身舎柱と裳階柱は切り面取りとする。



外側から、四天柱・身舎柱・裳階柱の順

【図5】柱の面取り

③ 虹梁



【図6】虹梁

5-2 本殿の復元

五百羅漢寺の本殿は規模が大きく、一般的に正面一間吹放しとなる空間が内部空間とされ、通常中央4本の柱が四天柱となるが、本寺では棟木の真下を通る2本を加えて6本の柱が四天柱となっていたと推定される。

柱脚には萬福寺・瑞聖寺同様、黄檗派建築の特徴である胴張りの四角い礎盤あり、本殿の床は板敷・石敷・土間部分があり、石が四半敷になっていない。

黄檗派寺院の特徴とされる円窓はなく、本殿には花頭窓もない。【図7】

本殿前方が地盤面よりも高くなっているのが、萬福寺・瑞聖寺ほどの高さも広さもないように思われるが、月台の変形したもので、向拝をつけているのが時代地域を反映している。【図8・図9】

6 結論

図会や絵巻物は信憑性に欠けるところがあり、描かれていない不明な箇所は、瑞聖寺を参考に復元を行ったが、『江戸名所図会』や『名所江戸百景』などに描かれている、かつて江東区に存在した五百羅漢寺本殿の姿を明らかにすることができたと思われる。

五百羅漢寺は初期の江戸黄檗派寺院とは性質が異なり大衆信仰のお堂であったといえる。本寺の開山は江戸黄檗の成立から 37 年の開きがあり、仏殿建立まではさらに 25 年の年月が経っていることから、江戸の町方階層が豊かになり、参詣に娯楽要素が入った頃に建てられたためだと考えられる。そして、その様な社会的変化に伴い江戸における黄檗派の位置づけも変化したと考えられる。

参考

『江戸名所図会』

『たくみの命脈 本所羅漢寺仏殿一象先の回遊風仏堂』
(『江戸っ子』16号1977年 アドファイブ出版)

『よみがえる羅漢たち 東京の五百羅漢』

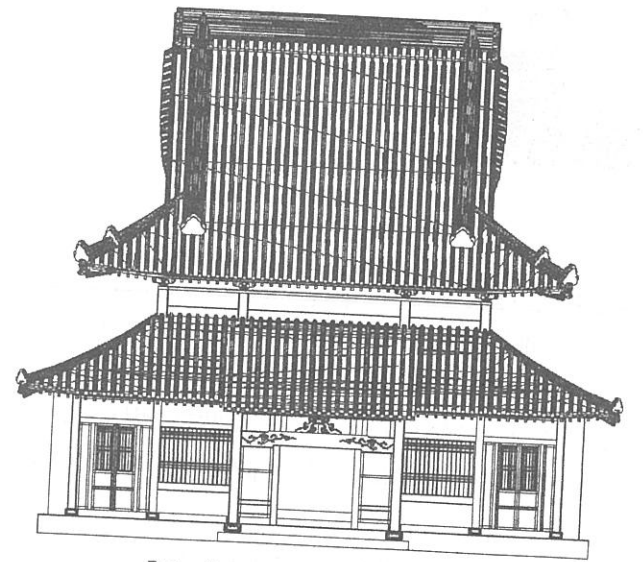
東洋文化出版 1981年

『重要文化財 萬福寺修理工事報告書』

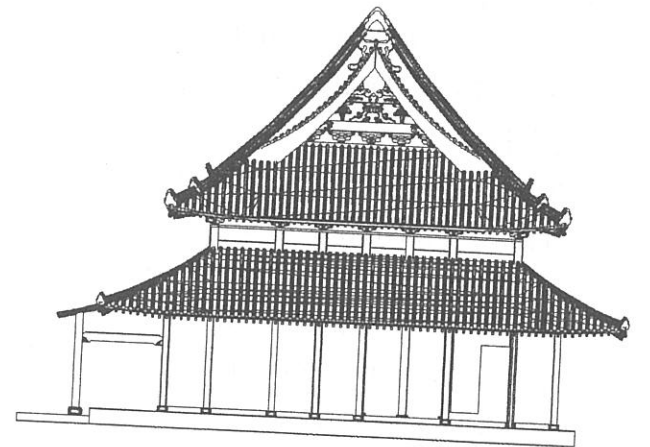
『東京都指定有形文化財瑞聖寺大雄宝殿・旧通用門修理工事報告書』

『江東区文化財研究紀要 第1号』

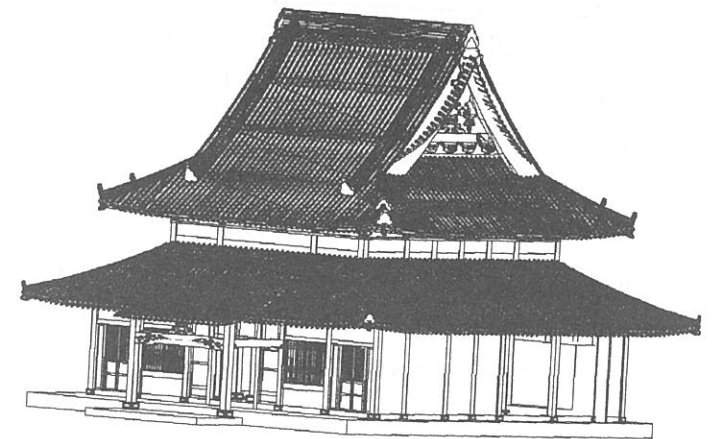
東京都江東区教育委員会 平成2年3月



【図7】五百羅漢寺 正面復元図



【図8】五百羅漢寺 側面復元図



【図9】五百羅漢寺 パース復元図